第2回
富田林市スポーツ推進計画策定委員会
会議録
（要点筆記）

令和7年5月20日開催

富田林市教育委員会

1　開 催 日 時　　令和7年5月20日(火)午後7時 00 分から午後9時00 分まで

2　開 催 場 所　　Topic(富田林市きらめき創造館)2 階グループ活動室A・B

3　出 席 委 員

委　員　長	児玉　公正
副 委 員 長	松原　裕一
委　　員	辻　雅之
委　　員	西田　卓司
委　　員	和中　剛
委　　員	金　美秀
委　　員	辻口　信良
委　　員	西川　由佳
委　　員	花岡　伸和(WEB 参加)
委　　員	和田　恵里奈
委　　員	尾﨑　竜也
委　　員	岩井　千景

事　務　局

生涯学習課長	坂本　篤史
生涯学習課付課長	山田　智彦
生涯学習課主幹	吉田　隆人
生涯学習課スポーツ振興係長	山田　伸彦

4　次　　第

(1)開会
(2)委員長あいさつ
(3)議事
　① アンケート調査の結果について
　② ヒアリング結果について
　③ 富田林市スポーツ推進計画(骨子案)について
(4)その他
(5)閉会

5 配 布 資 料	・次第 ・委員名簿 ・【資料1】令和6年度第1回富田林市スポーツ振興計画策定員会でのご意見に対する対応について ・【資料2】本日の審議ポイント ・【資料3】富田林市スポーツ推進計画（骨子案） ・【資料4】富田林市スポーツ推進計画の施策体系（案）と基本理念（案） ・【参考資料1】令和6年度第1回富田林市スポーツ推進計画策定委員会会議録（要点筆記） ・【参考資料2】富田林市運動とスポーツに関するアンケート調査報告書
6 公 開 の 有 無	公開
7 非公開の理由	―
8 傍 聴 人 数	0名
9 所 管 部 署	生涯学習部生涯学習課

10　議事等の内容（要点筆記）

(1)開会

(2)委員長あいさつ

(3)議　事

① アンケート調査の結果について

事務局　（「アンケート調査の結果について」、資料3に基づき説明）

和中委員　アンケート結果は市民へ公表はされるのか。

事務局　富田林市スポーツ推進計画の中に、アンケート結果を掲載しているので、公表すると考えていただいて結構である。

和中委員　計画の中のさわりではなく、参考資料2の詳細についても同様と考えてよいか。

事務局　お見込みの通り、会議資料として公開させていただく。

② ヒアリング結果について

事務局　（「ヒアリング結果について」、資料3に基づき説明）

和田委員　障がいをお持ちの方の意見聴取で、体育教員を含む教員方にヒアリングという説明があったが、教員だけではなく生徒など、もう少し幅広い方にヒアリングを実施した方がよいのではないか。

事務局　富田林支援学校に職員が訪問し、生徒が取り組むスポーツの様子を見学した。現地の教員から、知的障がいのある生徒がどのような工夫をしてスポーツに取り組んでいるかについて解説をいただき、意見交換を行ったが、生徒本人への聞き取りは難しかったため、先生方から代わりにお聞かせいただいた次第である。

辻委員　障がいをお持ちの方へのヒアリングについて、障がいを持っている一般の方へのヒアリングはないのか。スポーツ推進委員が障がい者スポーツ、ファミリーレクリエーションを実施しており、一般の方もスポーツをしていると思うので、意見を聞いた方がよいのではないか。

事務局　貴重な意見として承らせていただく。

辻委員　富田林市身体障がい者福祉協会からも、陸上競技等さまざまな競技で全国大会や府の大会に参加されていると思うので、そういう方の意見も聞いていただければと思う。

③ 富田林市スポーツ推進計画（骨子案）について

事務局　（「富田林市スポーツ推進計画（骨子案）について」、資料3、4に基づき説明）

児玉委員長　資料3の51～53ページまで現状と課題をまとめていただいており、これら6項目について1つずつ質問を受け付けていった方が話がしやすいのではないかと考えている。それでは、「課題1　子どもの体力低下とスポーツ離れ」について意見はあるか。

和田委員　課題1について、運動が嫌いと答えた方にとって「苦手だから」の割合が高くなっているという話であったが、スポーツ自体のハードルが高いと思っている方が多いと思っている。例えばドッジボール一つにしても勝ち負けがあると思うが、勝ち負けをなくしたドッジボールを実施するだとか、体力を高めるというより、自分が健康で楽しく暮らすための一つのツールとして「スポーツ」を捉えるイベントを実施するのがよいかと考える。

事務局　スポーツが嫌いな理由で、苦手という意見が多かったという点については、近年、子どものスクリーンタイムが増えており、外で遊ぶ機会が少なくなり、スポーツに接したり、体を動かす機会が少なくなってきているという印象がある。小さいときに体を動かしたことがあまりなかったので嫌いになっているというのも一つの原因かと考えている。

また、本市にはさまざまなスポーツ関係団体があり、子どもや高齢の方、あと家族で一緒に参加できるイベントを実施しているが、情報発信という問題もあるかと実感している。

西川委員　子どものスポーツ推進を考えるときに、「楽しさ」というのを多角的な面で考えていただき、企画していただけたらと思う。

事務局　多角的に「楽しさ」を考えるというところが非常に重要であり、多角的に検討していきたいと考える。

花岡委員　そもそもなぜ苦手に感じるのかを、課題として記載した方がよい。子どもたちが運動を苦手に感じるのは、他者と比較されるというところが大きいと思う。学校の体育では、自分で選べない、発育・発達に対して個人的に合わないものをやらされ、比較されるという現実があり、それが子どものスポーツ離れにもつながっているのではないかと思うので、比較しないというところも、うまく記載していただいたらと思う。

事務局　他者との比較について、現代の子どもには厳しい現実が突きつけられる部分もあるかとは思うが、苦手に感じるというところについては、ほかにもさまざまな要素があるかと思う。話は大きくなるが、学校の体育の在り方等についても触れながら、この課題についての肉づけを考えていきたい。

松原副委員長　スポーツを実施するのが嫌いと回答した人で、苦手という理由が多かったと思うが、そもそも嫌いと回答した人について、富田林の男性だと14．6％の人が嫌いと答えているという認識で良いのか。

事務局　　お見込みの通りである。

松原副委員長　　そうすると、運動やスポーツが「好き」だと思っている子どもが、男性で85．4％、女性で71．6％ということなので、基本的にはおおむね「好き」が多いという中で嫌いだという人がいて、その理由としては苦手だからということだと思うので、そこを考えながら議論していけば良いかと思う。

また、今回はアンケートしていないと思うが、理由の中でスクリーンタイムが多く運動の時間が減っていることが指摘されてるが、こちらについては別の富田林市の調査の中で、データはあったりするのか。

事務局　　現時点で持ち合わせる資料の中では分からない。

松原副委員長　　こういうのも指摘はされているとは思うが、指摘されているからそれが改善されていったりするのか、必ずしもそれが子どもの体力の低下に直結しているのか疑問があったので、関連があればと思い質問させていただいた。

西田委員　　私は生まれつき障がいで、全く体育とは縁がなかった。小学生の時に車椅子は乗っていたが、まだ自分では漕げず押してもらわないと動けなかったので、同級生と一緒に運動会に出たという経験もない。スポーツをどこでやり始めたのかというと、電動車椅子でもできるスポーツがあるということを知り、初めて大阪府の大会に出させてもらい、全国大会にも行かせてもらい、現在も実施している。

どこで自分が何を見つけるかというのは一つあると思う。できる・できない、興味がある・ないではなく、スイッチ一つ入ればスポーツはできると思うし、そのスイッチ一つがどこで入るかは、その人によって個人差がある。

現在はボッチャを福祉会館の事業として取り組んでおり、そこに参加しているが、障がい者は私1人で、あとは高齢の方で、楽しくやっている。難しいところはたくさんあるが、みんな1人でもできることがあるのではないかと思い、障がい者でもできるレクリエーションもたくさんあると思うので、そういう面を市民の方に一つでも多く知ってもらい共生社会を目指せたらと思っている。

事務局　　課題3として「共生社会実現に向けた取組」を掲げており、ボッチャを通じて障がいの有無関係なく楽しめるというのは、市として目指すべき点かと感じた。そういった思いも、この文書に肉づけとして考えていきたい。

金委員　　子育ての方は子どもを抱っこをするだけで体力、筋力がついてるので、無理に連れ出さなくてもよいかと思う。ただ、女の人はよく抱っこをするが、男の人で、子どもを乗せて腹筋や腕立てをするだとか、そういう家庭内でできる運動を推進するとかがよいかと思う。

和田委員　　家族でスポーツをする機会を増やすのはとてもよいことだと思う。例えば月に1回でもよいので、家族が一緒に過ごす時間を大切にしていくことが大事だと思っており、例えば夏休みのキャンプや山登りに参加することでポイント制にし、ポイントが貯まると、お得にお買物ができるクーポンがついてくるだとか、そういうのがあればお母さん世代もうれしい制度かと感じた。

花岡委員　　パラスポーツを経験したことがある、もしくは障がいのある人ない人でスポーツを実施したことがあるという調査結果について、中学生が成人と比較して割合が高いと思う。恐らく富田林市として、パラスポーツの体験を学校で展開してくださった結果だと思うが、この成人の数字を上げていくというのも、子どもが学校で体験できたか、学校で障がいのある人とない人が一緒にやるインクルーシブな状態を経験したかというところを継続してやっていくしかないと思っているので、今後も学校におけるパラスポーツの体験、そしてそこに障がいのある人もない人も一緒に存在しているというような環境づくりを進めていただきたい。

事務局　　我々の立場上、学校でこれを進めていくと断定できるような立場ではないので、実施していくとは言えないが、そういった意見、思いはこの計画に記載することが可能であるので、その思いをこの計画に記載していきたいと考えている。

花岡委員　　部署間の横断連携でよろしくお願いする。

西川委員　　花岡委員に第一中学校に一度来ていただき、子どもたちにお話をしていただいた。実際来ていただくのと紙で勉強するのは全然違うので、学校等での取組はどんどん進めていきたいと思っている。私も実際、車椅子バスケを子どもたちが体験するときに教師も一緒に実施するということで、人生で初めて実施した。見ていたのと体験するのでは全く違うスポーツで、大人になってからパラスポーツとか障がいを持っている方と一緒にスポーツをする機会、場所がすごく少ないと感じているので、そういう企画を富田林市で実施していただき、中学校で体験した子どもたちが楽しいと思ったら、大人になってもそういう企画があればどんどん参加するし、初めて体験してみようかという方もいると思うので、そういう取組をしていただけたらありがたい。

児玉委員長　　皆さまご承知のように、最近のオリンピックを契機にパラスポーツが飛躍的にマスメディアが取り上げて、我々の身近なところに位置づけられており、富田林市のスポーツ振興という形で欠かすことのできないテーマだと思うので、この辺りもいろいろとお考えを持っていただきながら、これから議論していただければと思う。

松原副委員長　　本学でもパラスポーツの授業、障がい者スポーツ論という授業があり、実際に障がい者施設で働かれている方に来ていただき学生に指導をしていただいたり、車椅子を持ってきていただいて、実際に乗りながら体験をするというのも実施していたり、初級障がい者スポーツ指導員の取得も本学で実施しているので、何か一緒に実施できたりすると、交流にもつながってくる。逆に、私たちの学生が中学校へ行って実施することができれば、すごく面白いと思った。

辻委員　　担い手の確保ということで、近隣の大学である、大阪大谷大学、大阪芸術大学、太成学院大学のような大学との連携で、専門人材がいる中で、指導者、学生ボランティア、研究者や施設の活用が可能になると思う。教育研究、地域貢献の視点からでも大学の協力はいただけると思うので、学生が地域のスポーツ活動に参加する仕組みを整えることで、若年層の地域の定着や交流の活性化にもつながるのではないか。

児玉委員長や松原副委員長は、大学で健康科学や教育分野で強みがあるため、指導のプログラムや開発の会みたいにできるのではないかと思うので、協力いただいて指導者なり、学生ボランティアなり、もしくはこれから問題になる中学校の部活動の担い手の発掘というのもこれから考えていかないといけないかと思う。

松原副委員長　さきほどの意見の通りで、本学としても何か地域に対してスポーツの指導ができればよいと思っている。ただ一方、現実的な問題として、指導者に求められる社会的なニーズも現実としてあり、学生が誰でもいけるということはなく、学生も学んでいる立場であるのでお金儲けが主になることはないが、普段の生活でアルバイトをしたりだとか、そういう時間を削って実施しなければいけないとなると、簡単な話ではない。あくまでも学ばせていただく立場でもあり、地域貢献という立ち位置でもあるが、ある程度学生に対しても少しメリットがあるような仕組みにしていかないと、継続していくのは難しい。また、逆にお金をもらうことで本人たちの責任も間違いなく発生し、それに対する責任を負うような立場になることも自覚できるかと思うので、そういう全体としての仕組みをつくっていくことが必要であるし、それができれば実際可能ではないかと感じている。

児玉委員長　授業と課外活動と両方で取組をしており、実際に授業では指導演習という授業で、幾つかの種目をパックにして、それぞれ独立して学生が自分の専門性を生かして、実際に担い手になるような体験をする機会を大学として用意しているのが実情で、それもひっくるめて、対象が子どもから中高年までの広い年齢層にわたって押さえていかなければいけない。

西川委員　ボランティアというところがなかなか厳しいかと思っている。部活動の話も出たが、今まで教職員が土日も出て、休日もなくボランティアという形で実施していることが多かったが、そこを全てボランティアというのではなかなか集まらない、指導者に希望していただけないと思うので、そこの制度としては、中学生だけで考えると技術指導のみではなく、チームづくりだとか仲間づくり、そういう信頼関係をつくるというところでも大人の指導とはまた違う面もあるので、ボランティアだけに頼るのはなかなか進んでいかないと思っている。

事務局　スポーツを支える担い手の確保というところは、スポーツだけではなく、さまざまな現場で次世代の担い手がいないということがうたわれている。その中でスポーツに関しては、学生が参画する仕組みや、先ほど意見のあった中学校部活動の地域移行も、市の一つの今後進めていくべき検討課題として私どもも認識しているところで、いずれは地域移行ということが進めば、学校教育と社会教育が一つに混ざった形になる形で、何かしら我々もそこに携わっていく立場になっていくのかと感じている。その中で、担い手づくりというところを一緒に考えられればと思っている。

金委員　施設の充実ということで、eスポーツの可能性をすごく感じており、実際会議室みたいなところで高齢者の方が十分楽しめる。10年先のことではなく、すぐにやっていただきたいと思っていた。

松原副委員長　施設の充実というところでは、昔からの課題かもしれないが、富田林市の中に人

工芝の施設が欲しい。そういう施設があればよりスポーツも推進されると思うので、ぜひ市としても検討していただけたらと思う。

辻委員　　民間のスポーツ施設や団体との連携も必要ではないかと思う。行政単独ではなく提携して連携していけば、もう少しいろいろな形でスポーツニーズや介護予防、高齢者対象の面でも対応できるのではないかと思う。

あと、小・中学校の学校開放の団体等の交流、場所の提供、活用というのが身近でできるところでは、一番近くで行けるところがあれば行きやすくなるのではないか。そこの団体・サークルに入るだとか、現在福祉で小・中学校単位のそういう協議会か何かが、その部分なんかを活用しながら進めていくのがよいのではないか。

西川委員　　さきほど、小・中学校という話が出たが、実際スポーツ団体の方にお貸しして体育館を使っていただいている。小・中学校も市に申し込むというシステムがあると思うが、現在借りている方は結構長く借りており、新規というのがなかなか難しい状況もあり、あと学校の施設を貸すということで、施錠的な問題もあり、お貸しするときに教師が出ていくだとか、オンラインセキュリティシステムをかけてる学校の問題をどうするかという課題もあるので、そういうところも考えていただけたらと思う。

児玉委員長　　資料の4に関して、どなたか意見はあるか。

辻委員　　基本理念で、「誰もがスポーツを楽しみ　みんながつながり　笑顔あふれるまち富田林」に、笑顔の前に「健康で」というのを加えていただきたい。

事務局　　前向きに検討していきたいと考えている。

(4)その他

(5)閉会